

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

# ふるさと風

第208号（2025年1月冬号）

常世の風に吹かれて呟いて（14） 白井啓治

（故白井啓治氏の9年前（2016年）の記事から

一部を抜粋して連載します。）

・元日とは言えど 変わらず明けて暮れていく  
ここ数年、いやもつとかな。お正月だからといって特別な用意もすることなく、普段のそのままにして新年を迎えている。

お犬様もお猫様も、一日の行動はきちっと決まっている。お正月だとか、休日だとかはない。毎日が同じリズムである。朝は四時半にお犬様に起こされて、散歩で一日が始まる。時間が天候に左右されることはない。雨だと、散歩の距離が短くなるだけ。この早朝散歩によって、一日の行動がきつちりと決められている。

お犬様、お猫様の行動を見ると、今日一日が大切に、今日一日をしつかりと生きている。

危険や安全の経験は即体内に取り込まれるが、過ぎたことを悔やんだり先のことには思い煩ったりすることはしない。その分だけ、今日、今を大事に暮らしている。人間どもも今日を大事に生きることを見習わなければいけないだろう。今日を粗末に暮らして、明日の貯えに何て事を考えるから日々の平安が遠退いていくのではないだろうか。陽だまりに四人で寝転んで思った元日であった。

（2016年1月1日）

・ほっこり梅のつぼみをメジロがついつい  
未だ正月三日だというに、外は春の陽気。

梅の蕾が今にも咲きそうなほどにほっこりと膨らんできた。庭の椅子に腰かけ、庭猫の椿を抱いて梅の木を眺める。

鶯（ヨドリ）が一羽やって来る。ほっこりとした暖かさにどうも鶯は似合わない。鶯が飛んでいくと直ぐに雀がやって来る。一羽がやって来ると必ず数羽がやって来る。雀が一羽チュン、何て事は殆どない。

梅の枝を追いかけっこをするように飛び移り遊んでいるかに見える。暖かいので雀らの動きも活発である。雀が何所かに行ってしまうと、今度はメジロが一羽やって来る。ほっこりと膨らんだ蕾をツイツイしている。綺麗な緑色の羽を光らせている様子は春の真つ盛りを思わせてくれる。



（絵：兼平智恵子）

黒猫椿は膝に抱かれてゴロゴロと喉を鳴らしている。余にも春過ぎて今日は正月三日であることを忘れてしまおうになる。廊下の陽だまりもぬくぬく過ぎて、お犬の愛々、お猫の雫は外の気配には全く興味がわかないようで惰眠を貪っている。

## ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、1・4・7・10月初めに会報作りを兼ねた懇親会と各月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額1,500円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0018 石岡市若松 1-5-38（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

余の陽気に気味悪さを覚えるのは、小生だけではないだろう。平安・長閑は嬉しいけれどこれから小寒、大寒を迎えるというのにこれじゃあ季節の言葉が涙しているに違いない。

（2016年1月3日）

・立春もまだ来ぬに陽の温もりは春分となり

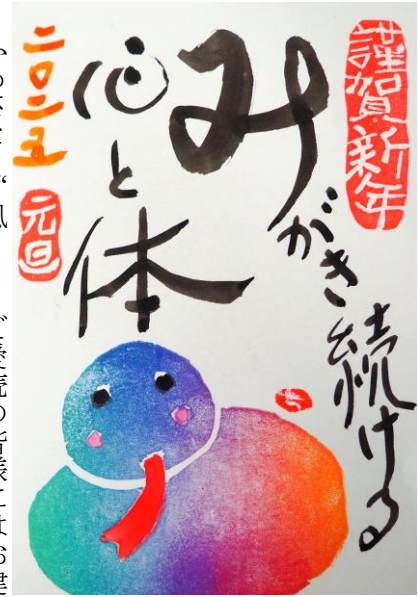
これはもう相当な異常。本日この地方日中の気温は16℃。立春はおろか小寒、大寒も未だなのだ。例年、三月中旬にならないと咲かない吾が庭の遅咲きの梅が、もう蕾をホッコリと膨らませ、明日にも咲きそうな様子を見せている。

週末にはまた寒波がやって来ると言うが、ほっこり膨らんだ蕾が霜枯れしてしまうのではないだろうか。春です。春真つ盛りの気温です。

（2016年1月4日）

巳年の始めに

兼平智恵子



ふるさと“風” ご愛読の皆様にはお健やかに新春をお迎えの事とお慶び申し上げます。

皆様にとりまして本年が爽り多き素晴らしい年になります事 心よりお祈りいたしてまいります

今年新しい自分に生まれ変わる、幸せな未来を掴むとも言われている己年、十二支では六番目、方位は南南東、巳の刻は午前十時前後、または十時から正午まで。

蛇(巳)の脱皮を繰り返す姿は“新たな自分に変わる”再スタートや変化のチャンスにめぐまれ、蛇のようにしなやかに変化を受け入れ知恵を活かして成長する。

また、蛇は田畑の害虫を駆除してくれる為、農業の守り神とされ「蛇がいると豊作」とも言われ、家の周りでへビを見かけると厄を取り除き幸運を呼ぶ存在と言われている。

皆様ご存知白蛇は特に金運アップのお守りと

して人気。こうした様々な縁起の良い生き物の巳年。

世界中に起きている戦いや不穏な動きが無くなりやすうに、自然災害も静まりますように縁起のよい蛇に期待を寄せています。(個人的には蛇は大の苦手)

ここで十二支の起源について一言

紀元前十六世紀の殷の時代に日付の呼び名に用いられ始め、戦国時代(紀元前七七〇年から紀元前 二二一年)には、年、月、時刻、方位の表現に使用され、秦の時代(紀元前二二一年〜紀元前二〇六年)に、文字の読めない人でも、時間や日にちが、わかるように身近な動物が選ばれたと言われている。

お知らせ

石岡市ふるさと歴史館 第三九回企画展開間 令和七年一月八日(水)〜四月六日(水) 「いまゆくすゑも定めなき土器にて」

石岡市ふるさと歴史館 第三九回企画展 「いまゆくすゑも定めなき土器にて」 展示解説 1月12日(日)10時から30分程度 申し込み不要。 直接ふるさと歴史館にお集まりください

開館時間 午前10時〜午後4時30分 休館日 毎週月曜日(祝日の場合翌日) 住所 茨城県石岡市総社一―二―十 石岡小学校敷地内 駐車場あり 入場無料 電話 0299-12312398

解体された旧石岡市民会館の空き地を背に佇む陣屋門の前を進み間もなく右側に、縦長の企画展案内板があり、この前を右折しますと、石岡小学校の東口入り口になります。車でおいでのかたは閉ざされた鉄の扉を開け校庭に駐車し、鉄の扉は閉めて頂いてご来館下さい。お帰り際にも扉を開け出車し、扉を閉めてお帰り頂きますようお願いいたします。 徒歩の方は鉄扉の右側に「ふるさと歴史館」の看板のある入口を開け閉めせずご来館下さい。

私ごとですが月に六回位受付当番を担当させて頂いております。 一階が企画展示、二階が常設展示となっております。 ご来館をお待ちしております。

〇年賀状じまい多し巳の年に 智恵子

## 我が人生の回想 19

木下明男

戦後80年、今年は色々な事を考える節目の年になるのだろうか？

労働者が中心の民主的文化組織であっても、お金が集まるところには不正が生じる事が多い。50年以上前に身を投じた文化運動「労音」で、表の顔と内面（実態）との違いを経験してきた。新しい活動拠点建設（会館設立資金計画）の為に会員に求めた僅かな寄付（カンパ）であっても、寄付者の数と期間の長さで大きな資金を生む。50年以上前には、10数万の会員数が居り100円程度の金額を会費に上乗せするだけでも多額の資金が集まる。毎月そして10年以上に亘れば、その額は巨額になり、その資金を管理する幹部は責任が重大。財産を持たない任意団体は、法律に関わる団体や会計組織を頼る。民主的な信頼できる個人や団体であっても、資金の管理は難しい。其処に悪意が無くても、期間のある間に流用や無断借用が生まれ、万に一つの齟齬が生まれる。そして信頼できる組織間であっても、返却を求めての訴訟が起きたりする。民主的な文化組織に入場税は不当・・・として、不払い運動をしていた鑑賞組織等の文化団体。最高裁で裁判闘争をしていたが、敗訴により国と和解を勧め、その時の事務所（含む土地Ⅱ信濃町）を売却し本税を支払った。（売却先は復帰したばかりの沖繩県）秘密秘密で運営されていた伏魔殿的な体制を一掃するため、文化・税金・財政等に強い大学教授に白羽の矢を立て、新体制で新会館（水道橋の全国労音会館Ⅱ1970年）を有する新しい運営体制を組織した。私はその組織の幹

部の一員として登用されたのです。

それから20年、時代は高度成長経済の社会に進展していく。世界の中で、日本は数年に亘るバブル社会のなかで狂乱時代に入りすべての価値観が大きく変化。古い体制を時代に対応した組織に変革するため、若手中心の運営組織で新たな労音運動の確立に向けて連日討議を重ねた。巨大な東京を一拠点だけで統括するには脆弱すぎる・・・巨大都市東京を、いくつかのエリアに分割（地域割り）し、其々に独立した組織を確立してゆく（地域労音）。協議体組織として東京労音を構築し全国の協議会に参加する。こんな中で新しい体制を実質的にしていくため、水道橋の全国労音会館を売却して其々の地域に拠点（会館）を建設する。それらの資金は、バブルの頂点（1990年）だったために膨大な価格が付いた。（坪Ⅱ3000万）会館は20坪の土地を有していた。全資金半分で各拠点を建設（大久保・十条・お茶の水・足立・蒲田・府中）残りの半額をプールしその利子（当時は5%余）を運営資金に充てる。過去の反省から資金管理団体として財団法人の設立方針を検討、その趣旨の案として「国際文化ギター協会ⅡI/C/G」を提案したが、纏まらず廃案になる。しかし拠点となるべき会館「ギター文化館」の建設は進行していく。建設場所は、東京周辺数か所を現地調査の末、ICGGの理事でもあった木下の提案が採用され、現在の石岡市（当時は八郷町）に決まる。無名な組織（ICGG）東京から離れた無名な建物、如何にしてその存在を社会に認知させるか？その命題を達成させる為、イスパニダ音楽祭（コロンブスが新大陸発見500年）としての企画を提起した。1年以上を掛けた企画をICGGの実務者に依

頼をし、過去の反省から充分に人選等を吟味し、諸々精査して進めたがある意味で再び過ちを犯してしまう。音楽鑑賞団体として、建てられた企画を労音の例会として進めるべきだった。労音の業務を圧迫しないように、クラシックギターと言うマイナーな音楽世界で働いているものに依頼。やはりお金のあるところには有象無象が集まる。莫大な経費をかけ、開催された企画（コンサート）は悉く失敗、数千円を赤字を計上してしまい、結果として私も責任を取り辞職するはめになってしまふ。労音の委員長、財団の会長を辞職・・・同時期に、40年近く務めた会社（Nikon）も退職し地域労音の事務局員として働くようになる。（55歳だった）それから6年、東京と松戸で地域労音の事務局員として働き、2002年からギター館の代表として石岡市の地域活動と共に働く。オーナーの労音本部から70を過ぎた時期から退職を迫られ、75歳でギター館を辞職する。

地域に眠る埋もれた歴史（96） 木村 進

【まほらの里】（4）

ブログ（まほらにふく風に乗って）の（2011年1月のブログから）いくつか興味深いと思われるものを何回かに分けて抜粋して取り上げたいです。今回は「養老の滝伝説」です。

### 養老の滝伝説

#### （1）養老の滝伝説

石岡には「親は諸白、子は清水」という史跡がある。場所は鹿の子から柿岡へ向かう柿岡街道沿いの村上地区の左側だ。

看板があるのだが、木々の陰になり、車だと思外にも気がつかずに通り過ぎてしまう。

昔、この村上は「村上1000軒」と言われた程、多くの家があった村で、龍神山の麓に多くの家が集まっていたという。

村上の名前は石岡府中の街の上に位置していたのでつけられたのだろう。

しかし、村上地区は地盤が硬く地下水などをくみ上げるには苦勞していたらしく、龍神山の湧水やこの「子は清水」の湧水などはきつと素晴らしいきれいな水ではあったが、とても貴重な水でもあったように思う。

もちろん酒処でもある石岡は良質な水も豊富だったのであるが、水源となる龍神山の龍も住むところがなくなり、泣いているに違いない。

現地の説明看板の内容を転記しましょう。

昔、この村上の地は、「村上千軒」といわれるほどの大きな村であった。

この村に貧しい親子が住んでいた。親孝行な息子は、毎日山に出かけては薪をとり、それを府中の町に売りに行つて、その日その日の暮らしをたてていた。年老いた父親は病気がちで、毎日息子が買ってきてくれる酒を、なによりの楽しみにしながら暮らしていた。

そんなある日、いつものように息子は、府中の町へ薪を売りに行つたが、その日は少しも売れなかった。



売れない薪を背負つて、途方にくれながら家路をたどっていると、どこからか香しい匂いが漂ってくる。

その香りの源をたどっていくと、木立のなかに清水がこんこんと湧き出していた。

息子は喜んで、この清水を腰の瓢につめて持ちかえり、父に飲ませると、父はその諸白(上質の酒)のうまさ驚いた。

翌日息子は、あまりの不思議さに、昨日の湧き水の場所に出かけて飲んでみると、それはただの清水であった。

それ以来、毎日この清水を父に飲ませると、病気がちだった父も元気になって、一人とも幸せな日々を送ることができたという。

この「親が飲めば諸白、子が飲めば清水」という養老孝子伝説は、古くからこの地方に伝わっており、次のような和歌が詠まれている。

なにし負う 鄙の府の 子は清水

汲みてや人の 夏や忘れん

旅人の 立ちどまれてや 夏蔭は

子は清水とて 先ず掬うらん

各地に同じような養老の滝伝説が残されています。何時ごろから伝わる話なのでしょう？

説明看板には「村上千軒」と出てきますが、もつと昔から話は変化しながら伝わってきたのではないかと考えられます。

また、看板に書かれた歌は何時のものでしょうか？

「石岡の昔ばなし」仲田安夫著(ふるさと文庫(1979年))によると、

「昔から、関東灘とよばれる酒の名産地石岡市大字村上に「親は諸白、子は清水」といわれる清水がある。ころは、奈良朝、聖武天皇の御代に「与一」という十一歳になる孝行息子が住んでいた。

噂は噂を呼び四方八方へ知れ渡つた。やがて、この話が、天子様のお耳にふれて「関東養老の泉」と命名された。

美濃の孝子の奇跡で、年号を改められたという「養老の滝の伝説」に似た美談であるからだといわれるのである。」

となつています。現地に立てられた説明板では、私には少し物足りなく感じます。

このような話を石岡の人はどのようにとらえて、またこの地を訪れた人にどのように説明できるのでしょうか？

「昔のおとぎ話が石岡にもある」程度にしか見えないかもしれません。

養老の滝伝説がどのように全国に伝わっていたのかを少し調べてみました。

まずは、岐阜県養老町に伝わる「養老の滝伝説」

は多くの人が知っているとありますが、概略は次のような話です。

昔、美濃の国に貧しいけれど親孝行の源丞内という若者がいました。

毎日山で薪を取ってきてそれを売り、年老いた父親を養っていましたが、暮らしては楽ではなく父の好きな酒を充分に買うことが出来ません。

ある日いつもより山奥に登るとそこに岩壁から流れ落ちる滝がありました。

近付くとかすかな酒の香りが漂って来るのです。不思議に思つてあたりを見廻すと岩間の泉から水が湧き出ています。

これをすくつてなめてみると香わしい酒の味がします。

そこで、腰に下げているひさごに汲んで帰り、老父に飲ませた所、とても美味しい酒でした。

親子は喜んで、仲良く和やかな笑声が村中に広がりました。

老父はこの不思議な水のおかげですつかり若々しくなりました。

この不思議な水の話が、都に伝えられ、奈良の都の元正天皇は「これは親孝行の心が天地の神々に通じたものでしょう」とおおせになり、この地に行幸になり、孝行の見本でもあるとたいそうお誉めになり、年号を「養老」と改めたといひます。

これは年号が「養老」になった年ですから、西暦717年のことになります。

元正天皇は聖武天皇の1代前の女帝(独身)です。聖武天皇がまだ若いので天皇になったものです。

これから考えても、孝子伝説は西暦700年代の前半のことになり、石岡の伝説が本当であれば、岐阜よりも少し後ですから、同じような時期の話になりますね。

またこれから生まれた話は二つに分かれます。

一つは水がお酒になった親孝行の「親は酒、子は清水」の話です。そしてもう一つは「若返る不思議な水」の話です。

この養老の滝の話は確かにあった話で、万葉集に歌われています(万葉集 卷六 1034)。

美濃の国の多芸の行宮(かりみや)にして、大伴宿禰東人が作る歌1首

「古ゆ人の言ひ来る 老人の 変若(を) つといふ水そ名に負う滝の瀬」

これによれば、養老の滝の話は「老人が若返る水と言われている滝の水があった」ことが伝わっていたと解釈されますね。(場合によっては病に効く水とも・・・)

若返りの水の話は、伝わるうちに「こぶとりじいさん」や「舌切り雀」のように物語として広がります。

「若返つたお爺さんの姿を見て、欲を出したお婆さんがその水を飲みすぎて赤ん坊になってしまった」というような話ですね。

では、親孝行の息子が父親に飲ませたら酒となり、子供が飲んだらただの清水であるという話は何時ごろから伝わっていったのでしょうか。

一般に養老の滝伝説は「養老孝子伝説」と言われるように、「親孝行することが美德である」ことを世の中に広めたいという思いが時の権力者側になり、広めさせたのかもしれない。

また、この水が酒になったというのはおそらくも

う少し後から始まったと考える方が時代的には合っているように思います。

酒造りに美味しい水が必要であり、どこかでの水が酒に化ける話を追加して作られたものかもしれません。

昔から良い酒を造るには美味しい水が不可欠であり、酒の名所と言うところに話は広がったものと思われまます。

では実際に何処に残されているのか？ 「子は清水」などの言葉で、ネットで検索してみました。

ここには出てこないけれども話としては残っているところもきつと多くあるに違いありません。

1) 「親はうま酒、子は清水」…松戸市常盤平(金ケ作) … 「子和清水」の像

2) 「親は諸白、子は清水」…関東養老の泉…石岡市村上

3) 「子は清水・親は酒」…習志野市

4) 「親はうま酒、子は清水」…佐倉市直弥 … 四街道市吉岡

5) 「子和清水」…郡山市西田町丹伊田

6) 「親は諸白、子は清水」…福島県会津若松市河東町八田字強清水(住所は強清水)

7) 「親ハ諸白子ハ清水」…福島県桑折町南半田  
8) 「親はもろはく、子は清水」…新潟県弥彦村大字麓

・子清水の湧水があるところ

「親清水子清水」…長野県清内路街道

・強清水(こわしみず)という湧水や滝があるところ

- ・ 強清水…岐阜県中津川市神坂
- ・ 強清水の滝…群馬県沼田市
- ・ 強清水…長野県長和町広原
- ・ 強清水…秋田県男鹿市
- (住所に強清水、子ハ清水がつくところ)
- ・ 新潟県佐渡市強清水
- ・ 福島県西白河郡矢吹町子ハ清水 など

面白いことに関東から東北方面が多くありました。灘など関西や中部地区には無いのでしょうか？ また一番多く出てきたのは松戸市常盤平の「子和清水」です。

ここには息子が水を手で掬っている像と一茶の句碑があります。

「母馬が番して吞ます清水かな」

またここは金ヶ作陣屋があったところで、前の街道を生(鮮魚)街道と言うそうです。

検索してたくさん出てくることはそれだけ地元熱心な人が多いに違いない。

二番目に石岡が出てきたが、これは私が造っているHPで、その他の人のHPはもつとずつと後一つだけ出てきただけだ。

残念ながら行政などが作ったものは一つもなかった。

話は面白いとは言えないだろうが、こういう話が残っていることをもう少し大切に作る土壌を植え付けていかないと何も無くなってしまいうる。

「関東の養老の泉」として是非これからも大切にしてもらいたいものだ。

また、強清水(こわしみず)⇨子和清水 とあることを考えると「強清水」なる言葉が先にあって「子は清水」となり、その言葉の連想から「親は酒」となったのかもしれない？・・・どちらにしろ、「酒処⇨水の質が良いところ」なのだから・・・きれいな水がわき出る地を復活してほしいものです。

### なま(鮮魚)街道

子は清水を調べていたら松戸市常盤平にある清水のところには「なま街道」という街道が通っていたと書いてあったので少し調べてみると結構面白いことが判りました。

なまは鱻という字(魚が3つ)だそうです。

この字は「鮮」の元字だといいい、この

「なま街道」は「鮮魚街道」ともいいうと書かれていました。

江戸時代中期以降でしようか、当時から鮒子は魚の一大



産地で、江戸の市場に魚などを運ぶ必要がありました。

しかし、鮒子から外洋に出て東京湾を運ぶのは海洋事故も多く危険なものだったようです。

このため、鮒子から舟で利根川を上り、成田線の布佐駅の近くで舟から馬に荷物を積み替えて松戸まで7里半(30km)位を陸路で運び、また松戸で舟に乗せ換え江戸川を下り、行徳辺りで新川の掘りを通って隅田川で日本橋まで運んだとい

？

伊東弓子

暮れに仕上がっていた原稿の下書きに気をよくしていた矢先、腹の立つ出来事を目にしてしまった。この問題を先に書いて訴え、考えてもらおう。そうすれば年の始めが素晴らしい出発になると考えた。

地域への訴えにするか、いやもつと広く「ふるさと風」に書いて訴えるかまよっているうちに、腹立ったまま訴えても値打ちが下がる。冷静になつてこそ人は受け止めてくれるものだ。と思いなおし、元に戻り、下書きの出来ていた「楽しさ」を清書しようと思ひ、置いた筈の所を探し始めた。・・・が見当たらない。雲隠れしてしまったのか。いくら探しても見当たらず、仕方なしに諦めた。が、

でも今まで、白井先生、木村さんに助けられてぬけたことがなかったのに、ここへきて残念、情けないような気持ちで書きなおしを始めた。進まないこと進まないこと、一日一日に追われて、気が急いても、頭が回って行かない。気が

ついたら咳が出て、背中がゾーンゾーンする。喉が痛む、辛い日々が続く。それでも尻を叩きながら努力はしたが、遂に諦めた。今回は楽しい文をお届けします。

今日はとてもよい出会いがあり、私の文よりも、その出会いに実あることを願っています。

(令和七年一月八日)

## 風と共に 《理》 大輪 啓展

毎回違ったテーマにて書かせて頂きます。

今回のテーマは、「新年のご挨拶」

新年あけましておめでとうございます。

昨年同様に、一年を振り返りながら、お付き合いいただければと思います。

私の2024年はまさに、我慢の年でした。

特に6月頃からは一喜一憂で疲れもしましたが、皆さんはいかがでしたか？

良い1年でしたか？

はたまた、私の様に何かに耐える1年でしたでしょうか？

お一人お一人、様々なドラマがあったと思います、良い1年を過ごした方もそうでなかった方も、新たな1年の始まりです。

この1年をどの様に過ごしたかによって、また来年の今頃にはその結果が出ているでしょう。

歳を重ねる毎に季節の移り変わりが早くなっています、お正月気分が普段会えない親戚と交流して

みたり、お餅や御節を食べ過ぎてしまったり、寝てばかり過ごしたり、寒い毎日が続くななんて思っている、いつのまにか夏になって、秋が来ないななんて思っていると、また正月だ！

毎年、日々の生活が重要だと感じてやみません。

2024年、前段で述べましたが、まさに我慢の年。

私生活と言うよりは、仕事での我慢の年、その様な一年でした。

今現在も進行形ではありますが、新規事業の先駆けとして、今与えられている状況が今年の命運を握るといふ、最悪な状況下にあります。

どの様なコミュニケーションでも同じ事が言えますが、頭が無能だとその下に行けば行くほど煽りを受けると言う事です。

管理職の仕事はどう捉えているのか、甚だ疑問ではありませんが、

ましてや事務仕事を一人で抱えこんで、後輩・部下を育成する事なく、現場の意見に傾聴する訳でも無く、適正な人事配置を決める訳でも無く、

そんな人物が直轄の上司であるが故に、日々のストレスは私だけでなく、間に挟まれる中間管理職と呼ばれて、しっかりと実務をこなしている立場からすれば、誰でも受けているのが辛いところです。

そして、そんな有能な部下が置かれた状況下で実績を上げれば、それは無能な上司のえ手柄になると言う図式がさらに頭を悩ませる要因となります。

会社の状況を考えればとか、現場の社員の事を考えればとか、どんな状況下にあるうともそれを難なくこなしてしまう事がよく無いのではないか、されど現状打破しなければ先に進めないと言うジレンマの中自分がどう立ち回れば良いのか。

本当は答えは分かっているが動かたく無い、

皆さんもこの様な状況、経験ありませんか？

それでも結局はこなしてしまうんですけど、

本来であれば、新規事業が3月を目処にスタートしますから、1月現在だとすると、経験豊富な中堅社員で固めて、研修などをしながら起こりうる事象を予測して検証し、そこに備えると言ったタイムスケジュールにあるはずが、

一月より人数合わせとして必要体制の1/3程の人数を新人ばかりで構成して配置、新規事業どころか基本さえしっかりしていないメンバーを、僅か2か月程で基本作業+新規事業についてレクチャーしなきゃ行けない、そんな事あり得ますか？

部内初の試みとしての事業に対して、そんな人事あり得ますか？

って事なんです。

沢山の愚痴が出てしまいましたが、今私が置かれている状況を簡単に説明すると、この様な感じなのです。

昨年末には風邪だったのか、高熱と節々の痛みや咳等々、病院やクリニックは大混雑のため、自力で復活しましたが、未だに咳や鼻水・鼻詰まりが解消されません。

これも日々のストレスによるものではないかとさえ疑ってしまい、さらなるイライラの原因となりますが、妻の看病により何とか元気にやっております。

仕事の話はこの辺にして、

皆さんの日々の楽しみや趣味、何かありますか？

毎日暗いニュースや事故等々絶えませんが、そんな毎日にも明るい・楽しみ・笑顔になれる様な何かが必要だと思います。

これが無ければ日々の受圧に押されるばかりですから、何か一つは見つけてそれを育てていきましよう。

私はNetflixの様な媒体を通して、映画やドラマの1気見だとか、仲間と集まって飲み食いしたり、一昔前ですとゴルフやスノーボードと言ったありきたりな事ではありますが、その辺りを定期的に実施する事で、ストレスの軽減やメンタルの維持に努めています。

一人になって集中出来る事、複数人で楽しめる事、これら以外にも沢山ありますから、是非是非そんな時間を大切に、自分ワールドを楽しんでもらえたら良いと思います。

昨今様々な事件が起きていますが、一番多いのは

お金に関するトラブルですね。

知人や家族間でも殺人に発展するケースも少ないので、特に親しい間柄でも金銭の貸し借りは危険だと言わざるを得ません。

お金が無いと心に余裕を持つ事はできません、相当裕福な家で無ければ、少なからずある程度の方が経験しているのではないのでしょうか、たかがお金、されどお金。

今の世の中、お金を持っているに越した事はありませんから、様々な理由が人それぞれあると思いますが、他人を傷つけてしまったり、自分も被害者もそしてそれらにまつわる家族・友人等を巻き込むことになりまますから、今後の政治対策としても、表面上で低賃金者達への政策だけでなく、望む人全てが何かしらの職に就いて、少しでもお金にまつわるトラブルや事件が少なくなる様な施策を打って欲しいものです。

また、「近所トラブルも昔と違って、個人主義が強くなってきているせいか、増えて来ていますから、近所さんとも最低限の挨拶等を交わしながら、何かの緊急事態には助けあえる様な体制も必要では無いかと感じています。

物事には一長一短ありますから、ケースバイケースとなつてしましますが、良い悪いを見極めながら自分達の生活をより良いものにしていきたいものです。

今年一年が皆さんにとって、良い一年となります様、お祈り申し上げて今年のご挨拶とさせていただきます。

それではまた次回に。

## 東アジアの仏教見聞録を尋ねる 西方保男

騎馬民族説の考古学者江上波夫はさる対談で日本仏教について次のように言う。中央アジアの国々やチベットや中国でそれぞれの言語で翻訳された仏典があるのに日本仏教はなぜ仏典の日本語訳をしなかったか。

しかも日本読みだ。だから読んでも聞いても庶民はお経の意味がさっぱり分からないだろう。それでいいとする日本仏教とはなんぞやという疑問を起こさせる。

涅槃(ねはん)をそのまま、ネハンと読んで分かんなければわからないでよろしいといった態度である。

これは坊さんたちがはじめから日本人に仏教を教える気がなかったのではないかとさえ思われると、江上波夫はこのように言うが、日本の仏教認識について考えていきたい。

そこで、日本の仏教学者の中村元(はじめ)のもとで仏教学を学んだ植木雅俊の著書「仏教本当の教え」を参照引用し、インド、中国、日本の仏教を探る。

さらに中国における仏典の漢訳と仏教受容の認識を再考する。紀元前五世紀のインドで生まれた仏教。

中国では布教に漢訳の経典を輸入した。両国においてサンスクリットの原典は、ほとんど顧みられていない。

中国は漢訳ならではの解釈を生み出し、日本では特権的知識階級である僧が、意図的に読み替えた例もある。ブッダの本来の教えをサンスクリット原典から読み解き、日中両国における仏教受容の思惑・計算誤解をあきらかにする。(植木雅俊)

漢訳は二世紀の中頃に西域の安息(あんそく)国(バルティア)というペルシヤの国から安世高(あんせいこう)という人物が、一四八年に中国の洛陽(らくよう)にや



ってきた。名前に「安」とあるのは安息国(あんそくこく)から来たということの意味している。そのすぐ後に、支婁迦識(しるかせん)という人もやってくる。ローカクシエーマという名前が婁迦識(るかせん)と音写された。頭の「支」は、カニシカ王の支配していたアム河を中心とする中央アジアから西北インドに至る月支(月氏)国(こく)で、「月支から来たローカクシエーマ(婁迦識)」を意味している。

この二人の後に二〇〇人近くの訳経者が続き、その中の代表的な人物は、鳩摩羅什(くまろじゅう)(五世紀)、真諦(しんたい)(六世紀)、玄奘(げんじょう)(七世紀)を挙げることができよう。訳者の出身地で最も多かったのは中央アジアで、安息出身では安世高のほか安玄(あんげん)、安法欽(あんほうきん)、安文惠(あんぶんけい)、安法賢(あんほうけん)など、月支出身では支婁迦識(しるかせん)のほか支曜(しやう)、支法度(しほうど)、支疆梁接(しきやうりやうせつ)、支施崙(しせろん)、支敏度(いびんど)、支遁(しんと)らの名前も見られる。支謙(しけん)は月支からの帰化人の子孫である。現在のキルギス地方にあたる康居(こうきよ)(ソグディアナ)出身者では康孟詳(こうもうしょう)、康僧会(こうそうえい)、康僧鎧(こうそうがい)、康巨(こうきよ)などがあり、龜茲(き) (クチャ)の王族出身を示す白(帛)姓を持つ白延(はくえん)、白法祖(はくほうそ)、帛尸梨蜜多羅(はくしりみつたら)などの名前が見られる。中央アジア出身者のほかには、インド出身者が活躍した。天竺(てんじく)出身であることを示す竺(じく)の字を持つ竺仏朔(じくぶつさく)、竺将焰(じくしょうえん)、竺宝蘭(じくほうらん)もいる。敦煌(とんこう)生まれの竺宝護(じくほうご)の名前に竺(じく)とあるのは、天竺(てんじく)に留学したからであろう。北インド出身の仏陀跋陀羅(ブツタバト

ラ)や菩提流支(ボーデルチ)、勒那摩提(ラトナマテイ)、中インド出身の仏陀扇多(ブツダシャーンタ)、西インド出身の真諦(パラマールタ)などが特に知られている。それらの二〇〇人近い訳経者たちによって、六〇〇から七〇〇巻もの仏典が漢訳された。その中で、中国、日本に最も影響が大きかったのは鳩摩羅什(くまろじゅう)の訳であった。

中国では、日本のようにカタカナにあたるものがなく外来語はすべて漢字で表記される。例えばポピュラーミュージックが「流行楽」、ロックンロールが「摇滚楽(ようこんがく)」というように外来語は意識されることが多い。

ヘビーマタルが「重金属楽(じゅうきんぞくがく)」だ。外国語を生かしたいときには音写もされ、

ジャズが「爵士楽(爵士がジャズの音写で、楽は音楽であることを示すために付けられている)。ブルースが「布鲁斯」、コカコーラが「可口可乐」といった具合である。ただし、人名は意識するわけにもいかず、もっぱら音写される。例えばベーターペンを「貝多芬」チャイコフスキーを「柴可夫斯基」という具合である。化粧品会社のマックス・ファクターが「蜜絲仏陀」で「仏陀」の二文字には驚かされる。さて、それでは、江上波夫のいう、日本仏教はなぜ仏典の日本語訳をしなかったのかという疑問についてであるが、植木は「翻訳しない五つの理由」として著書の中で次のようにいう。

玄奘(げんじょう)は、「翻訳名義集」でインドの言葉を中国の言葉に翻訳しないで音写する理由を五つ挙げている(五種不翻(ごしゅふほん)、第一に、「秘密の故に」を挙げている。これは、密教の呪句である真言・陀羅尼のように秘密の奥義は別の言葉に翻訳するのが困難であるからということだ。

例えば、『般若心経(はんにやしんぎょう)』の真言・陀羅尼(だらに)を玄奘は、次のように漢訳している。羯帝(ぎやてい)・羯帝(ぎやてい)・般羅羯帝(はらぎやてい)・般羅僧羯帝(はらそうぎやてい)・菩提(ぼじ)・僧莎訶(そわか)

これは gate gate Paragate parasamgate bodhi svaha を音写したもので、中村先生の訳によると次のような意味になる。

行き往きて、彼岸に到達せるさとりよ、幸あれ 玄奘は、あえて意味の分からないものにして呪術性を高めようとしていると言えよう。

第二の「多義を含むが故に」は、一つの言葉が多くの意味を持つ場合、一つの意味を訳すと他の意味が抜けてしまうから翻訳しないということだ。第三の「ここに無きが故に」は、中国には存在しない動植物や、固有名詞は訳しようがなく、音写するしかないということである。第四の「古(いにし)へに順ずるが故に」は、アヌッタラ・サミヤク・サンボーディ(この上ない正しく完全な覚り)を音写した阿耨多羅三藐三菩提(あおくたらさんみやくさんぼだい)のように、これまでの伝統に従い翻訳しないということだ。第五の「善を生ずるが故に」は、例えばバンニヤーを「智慧(ちえ)」と訳さないで「般若(はんにや)」と音写したのは、有り難みが薄れるからということだ。第一と第五は、呪術的效果を意図したものと見えよう。

さて、頭初の見聞記に戻る。玄奘三蔵の『大唐西域記(だいたうきやくき)』やマルコポーロの『東方見聞録』と並び、日本においてもこれら二書に匹敵すると評価され、世界三大紀行文の一つとも言われている。

る旅行記が存在するのはあまり知られていない。その著者は、大唐中国へ遣唐使一行と仏教求法に旅立った第三代天台宗座主(さす)の慈覚大師円仁(じかくだいしえんにん)である。この円仁が苦節西暦八三八年〜八四七年間に亘る在唐十年間近くの見聞記を書き綴り残した『入唐求法巡礼行記(にっとうくほうじゆんれいこうき)』がそれである。では、日本人として唐代中国へ勇躍求法に旅立った足跡をたどろう。そしてこの紀行文は、当時の中国唐時代の政治、宗教、社会状況、民衆の風俗習慣等が克明に観察記録されている貴重な見聞記だと言われている。



この見聞録について、前述の仏教学者中村(はじめ)博士は、この円仁の研究について、この研究は種々の点で卓越せる特徴をそなえていると次のようにいう。

つねに世界史の流れの中において相互の連関に注意しながら有機的なくらい、著者は邦文文献に通じているために、個々の研究は、必ず日本の学者の業績をふまえて、その上で立論し、一々原典に当たって究明してあるばかりでなく、円仁の足跡を实地踏査している点で着実な実証性がうかがわれる

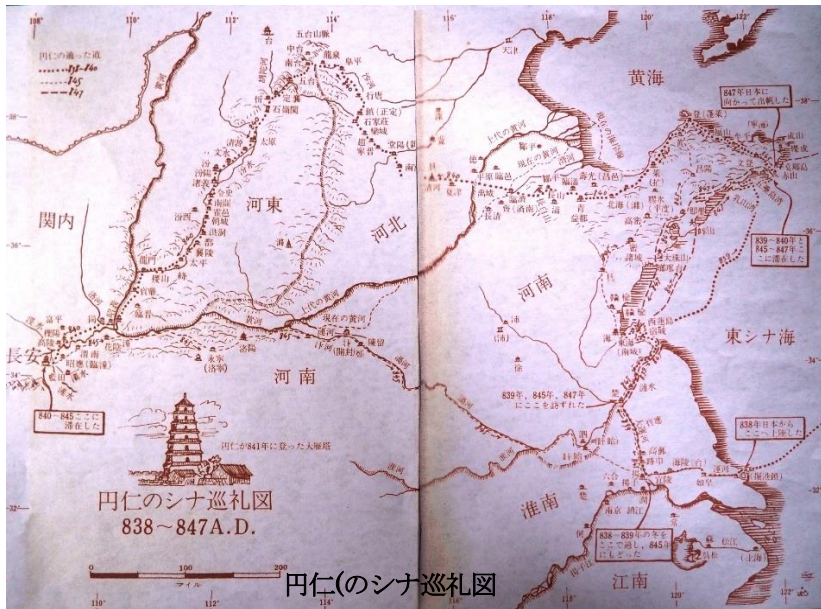
円仁と彼をとりまく人物群を、あたかもまのあたりみるかのごとく生き生きと描写している。日本人の、しかも千百年前の登場人物の心理を心憎いまでに浮

彫りにしている。

歴史学者として、現象の奥底にある意味を読み取る努力が顕著であり、社会学的な分析の方法をも駆使している。

当時の仏教信仰の実情に同情的な理解がみざり、「異教徒」としての誤解の跡を残していない。

この書では仏教思想は表面上の課題とはなっていないにもかかわらずその造詣の深さの片鱗がにじみ出ている。これは或る点では敵父A・K・ライシヤワI博士の『日本仏教研究』に由来するものであろう。(以上、中村 元)



この貴重な見聞録から九世紀の中国の国状が実によく鮮やかに浮かび上がってくるのである。そして、仏教の視点で注視すると幾多の歴史の変遷から、特に『仏教の三大法難』の一つ、円仁が遭遇した九世紀の大唐帝国での仏教受難の様相が克明に詳述されている。

我が国日本においても、明治三年、仏教界は「神仏分離令」により廃仏稀釈の大弾圧を受けた歴史がある。明治維新の動乱期に、日本の伝統文化の根幹を担った日本の仏教は徹底的に弾圧された。原田伊織は、仏教弾圧について次のようにいう。奈良・興福寺や内山永久寺の惨状は、中でも筆舌に尽くし難い。興福寺だけで二千体以上の歴史を刻んできた仏像が、破壊されたり、焼かれたりしたことが分かっている。僧侶は、ほとんど全員が神官に、文字通り「衣替え」したり、還俗することを強要された。經典は、町方で包装紙として使われるというゴミ同然の扱いを受け、五重塔は二十五円(一説には十円)で売り出された。薪にするために売りだされたのである。多くの宝物は、混乱に乗じた略奪等によって散逸し、二東三文で町方に出回ったのである。因みに、現在の奈良ホテルや奈良公園は、当時の興福寺の敷地内である。興福寺と共に我が国四大寺の一つという格式を誇った内山永久寺に至っては、更に酷(ひどい)もので、徹底的に破戒され尽くし、今やその痕跡さえみられない。姿を残していないのだ。この世から抹殺されてしまったのである。「廃仏毀釈」とは、それほど酷(ひどい)仏教文化のせんめつ運動であったと原田はいう。

では、我が国の廃仏稀釈は、いつごろから始まったのだろうか調べてみよう。古くはわが国の飛鳥時代欽明天皇の時に外来仏教を排撃したことがあ

った。百済国の聖名王が仏像・経論を献じてきたのをめぐって蘇我氏と物部氏が争いを起こした。しかしその後、百済国とも通じ進歩的な蘇我氏が仏教を礼拝したのであるが敏達天皇の時代になって堂塔を焼かれるなど二度の迫害を受けた。しかしその後、物部氏の滅亡もあり聖徳太子の保護により仏教は飛鳥文化の土台となるまでに栄えた。最近では明治維新に宗教政策として「神仏分離令」が出され、これに端を発して各地に寺院、仏像、経巻等を破壊し焼却する運動が続発した。最初に行なわれたのは慶応四年（一八六八年）四月、比叡山坂本日吉社（ひえしや）で仏像・僧像・経巻・宝器等が破壊、焼却された事件である。その後廃仏稀釈の風潮は全国に波及し、翌明治二年（一八六九年）には、土佐藩で寺院総数六一五か寺のうち四三九か寺が廃され、薩摩と隠岐島（おきのしま）では全廃、富山藩では一派一寺に限定された仏教伝来から千数百年間、日本の宗教界仏教と神道が混合状態のまま続いた。徳川時代に入ると幕府は全農民町民を全国に散在する寺院の檀信徒とし、宗門人別帖を作成して改宗を禁止した。明治維新を迎え、新政府は神仏分離の名目の下に幕藩体制の破壊を企て、その結果、仏教が主、神道が従というそれまでの勢力関係が逆転し、祭政一致の神道国家である明治政府が出現した。しかし神道の国教化は法的に見ても信教の自由に反するものであり、歴史的にみれば、八十年後の第二次世界大戦における日本の大敗を導く原因であった。（続きは次号）

参考文献：入唐求法巡礼行記・玄奘三蔵・法顯伝・宋雲行記・円仁唐代中国への旅・道教と古代日本・仏教本當の教え・仏教哲学大辞典・梵漢和対照現代語訳 法華経（上・下）

## 人生を振り返る

山中 忠雄

今年（2024年）も、今日を入れて二日です。こ土浦に住んで、来年一月に私は82歳になります。来年は、昭和百年です。私は、土浦市内で昭和18年1月に生まれました。縁があり、上天津に住んで57年になります。現在家族は、3人で住んでいます。私の生まれた町は、旧市内にありました。小学校は、昭和24年に、下高津小学校に入りました。当時は、戦後まもなくだったので約200人ほどの一年生がおり、三クラスあり、一学級65人ほどでしたので、二部学級でした。二年生の二期に、市内富士崎町に土浦第二小学校が完成していたので、そちらへ移動しました。クラスは確か4クラスあり、一クラスあたり40名ほどでした。第二小学校の校歌の思い出がないので、最近確かめたところ、小学校を私が卒業した昭和30年に校歌が出来たようです。

下高津小学校の同級生には、今でも、たまにお会いします。一人は、理容師さんです。もう一人は、現在私と同じデイサービスに行っているIさんです。今でも元気に家業を継いだ息子さんの手伝いをしています。

当時の小学校の休み時間の遊びは、男の子は、外に出て砂場で、相撲でした。

中学生になると、土浦四中に進学しました。昭和30年4月入学でした。一学年6クラスあり、市内の四か所の小学校から二四〇名が集まりました。その4校は、下高津小学校、土浦第二小学校、大岩田小学校、それと東小学校でした。東と書いて「アヅマ」と読みます。私は、一年生の時には、

確か6組でした。担任の先生は、英語の女性の先生でした。通学は自転車でした。一クラス40名程の生徒がいました。

高校生活は、また次回に報告します。

そろそろ、本題に入ります。今年一年を振り返ってみます。一月に入って、親戚の、かすみから市の磯山家の尚さんの奥さんが、病気で亡くなりました。享年88歳でした。御主人の尚さんは、今年の8月で91才になり、元気です。二月には、老人会の仲間のIさんが亡くなりました。亡くなる一週間前まで、子犬と散歩をしていました。享年92歳でした。私は、散歩は、もっぱら自転車、田舎の田圃を、のんびり、自転車で動いています。ある時、家族旅行で千葉方面に一泊した時の二日目に、成田山新勝寺で食事をした帰りに、やけに疲れるので、主治医に紹介状を書いてもらい、つくば市内のM病院で、精密検査を受けました。結果は、狭心症の疑いがあるとのことでしたので、今月の5日入院して、6日に手術しました。手術は成功して、8日に退院しました。82年の人生において、手術は2度目です。長い人生で、今回の手術は、1時間30分かかりました。これからは、体力をつけて、一日30分の散歩に心掛けます。

このたびの心臓の手術で、びっくりしたのは、日本の医学の進歩です。この病院は、昭和60年の春に、新治郡桜村に完成し、以来40年近く経つ病院です。医師の方や、メディカルの方は、優秀な方ばかりです。私は、米寿まで、健康に留意して、楽しい人生を歩んで行きます。年に6回の年金と、娘達の多少の援助で、これからも、前向きに人生を謳歌していきます。

（2024年12月30日記）

長く続いた極暑も終わり・・・？待ち続けた秋は中々来ない・・・？やつと来た秋も味わう間もなく、冬がやってきた。北の方では大雪の便りが・・・これも、温暖化の症状とか。日本の季節はどうなってしまうのか？

【10月】

・隣接する笠間市では新栗まつりで賑わっているようです。私は今朝も時栗拾いに行きました。天気が悪いせいかまだ薄暗く、しかも蚊の大群が待っていましたとばかりに・・・。この栗畑の持ち主、体調崩し管理が出来なくなり、放置するにはしのびなく、隣のご主人と一緒に拾って出荷しているのです。栗は、利平と言う大粒の種類、取り終わるまでは、あと数日はかかるでしょう。

・手のしびれで療養していた竹の師匠、無事治療を終え、元の生活に戻りつつある。そこでささやかな、快気祝いを、長井農園さんのご尽力で開催した。お取り寄せのお料理に舌鼓、おしゃべりも弾み、師匠も久しぶりのアルコール美味しそうに味わっていた。私も若いお弟子さん達と楽しいひとときを過ごした。

・気持ちのいい秋そら・・・。猛暑続きで、手っかずの家回りをちよつとだけ片付けた。古い柿の木に、いっぱい実った渋柿はどんどん熟して、鳥たちのご馳走になっている。暖かい日が続く今年も干し柿は無理のよう・・・？干し柿は、グツと寒くなり寒風がふく頃（一霜降りる頃・・・）でないと、黴てしまう。そこで夫は、柿酢作りに励

んでいる。おとし仕込んだものが、おいしい酢になってきた。

・今年の干し柿事情・・・気候の定まらない日々、そして暖かい日が続く。干し柿にする渋柿はどんどん熟し、落下している。地面は一面、熟した柿で溢れ、蝶々たちが甘い果実を吸っている。スズメバチたちも乱舞しているので、思わず掃除の手を休めてしまう。この熟した柿、今日は最高の状態で食べて見た。最高の美味しさだった。我一人満足し思わずニンマリ・・・。

【11月】

・文化の日・・・園部公民館では文化祭が開かれている。わが「オーリーブクラフトクラブ」でも飾り付けをした。そして、ワークショップではミニランドセル作りをした。途切れること無く、お子さんから90才のお祖母ちゃんまで楽しんで貰う。学校関係の方達からも、大変興味深いくいろいろ質問などありました。今年は小さなかわいいものを中心に展示。

・駐車場には朝早くからテントが張られ、焼きそばやワタ飴の準備など役員さん達は頑張っている。昼前には、バルンアートのみはるさんの処に子ども達が群がる、あおぞらで良かった。

・先日柿を買いに0柿園へ・・・0さん曰く今年柿の大打撃。カメムシの被害が半端でなく、土産物・贈答品はお断りしていると嘆いていた。それならと、ひとやまのざる売りを求める・・・。すると、0さんは、金は要らないよ・・・来年良いものが出来たら、いっぱい貰うと・・・遠慮なく頂いた。0さんの背中が寂しそうだった。おじさんは90才、まだまだ頑張ってほしい。頂いて来たカメムシにいたずらされた柿、いつも通り甘く

とても美味しかった。

・お味噌・・・友達との会話で、お味噌が黒かびに覆われしまい、大分捨てたなんて話になった。我が家の2月に仕込んだ味噌はどうだろうか、と恐る恐る開けて見ると、きれいな味噌。カビはまったくなく、思わず自画自賛。来月早々兄妹会があるので、ジッパーに詰めお土産に用意した。大豆は地元の長井農園さんのもの。糶も地元の東屋さんのもの、あまりの美味しさに、ニヤニヤしながら豚汁作りを・・・。

・スペインから懐かしいお客さん・・・I。マエストロ M・カーノ（ギター文化館に世界的なギター名器を提供したフラメンコギタリスト）の子息で、医者でフラメンコギタリストの「ホセ・カーノ」が息子を伴ってやって来たのです。勿論、吉川二郎さん野口久子さんと共に、東北2ヶ所のコンサートを終えて静岡へ向かう途中、鹿沼に1泊すると言うので夫と2人で会いに行き、近況など語り合った。数日後にはギター文化館にてコンサートがあるとの事・・・息子のホセに、祖父が提供したコレクションを見て貰いたい、そして自分も父のギター名器に会いたい。そして響きの良いホールで弾いてみたい。そんな思いを語ってくれました。それにしても、スペイン語で語りたかったなあ・・・。

・不思議、そして懐かしい御縁の繋がりが・・・II。夫が音楽活動に没頭していた頃の、1983年マエストロ M・カーノ（故濱田滋郎氏の紹介）が労音の招きで来日、全国60を超す都市でフラメンコギターコンサートが公演された。その時、マエストロ M・カーノの高弟だった吉川二郎氏とも、その時からのお付き合い。今回息子のホセ・カーノ氏が息子

を伴い来日。東北、静岡、そしてギター文化館のコンサートを終えて、鹿沼で再会後に再度合流。宿泊先から近いお店「丸三ツバ」を貸し切りにして飲んだり食べたり、トンカツや天婦羅も美味しいと・・・ただお蕎麦は苦手、噁れない。地元の日本酒、升酒にも興味津々。翌日は前橋、その後神戸、大阪とコンサートが続き週末成田から帰国する様です。

## 【12月】

・御前山迄ラーメンを買いに・・・数年前からこのラーメンにはまっています。午前中に着いて2.バック(20玉)注文すると1.バックしかダメ・・・?遠くから来たとネパッテみたが、ダメだった。前回は買ったのに、残念だった。御前山は両親が元氣だった頃温泉によく連れて来た想い出の地。素朴な道の駅もありここも気に入っている。最近はその珂川の河原に降りて、丸い平たい石を拾うのも楽しみです。道の駅もこじんまりした店内に地元の食材豊富でつついづい買います。

・時の過ぎるのはなんて早いのだろう。今年も後一週間。干し柿は前半に干したものは、全滅。寒風が吹く頃干したものは、美味しく仕上がりました。今日は「イブ」。知人からローストチキンも届き、クラフトでの長靴とツリーを飾り、1人満足します。

・はかどりません。夫は中々の読書家。積もり積もった本が、壁の両側の作り付けの本棚に溢れ、これが、長年の争いの元となっています。今回思い腰を上げて、始末し始めましたが、まだ1%にもなっていません。3日かけてやっと本「2」冊処分。断腸の思いでしょう。

・食事処「杜の家」が閉店しました。鳥取県から知人もいない石岡に来て開業して7年。美味しいランチやお弁当を提供してくれました。この度、長い間の水仕事で手の荒れがひどくなったり、運転に不安が生じたりで東京に引越す事になったのです。食事に行った私の持っているクラフトのバックに興味をもったママは、自分も作りたいと言うことで、しばらく前より、店の休みを利用してクラフト編みをしていました。店のお客様と4人で楽しんでいましたが、寂しくなってしまうママは新しい生活にワクワクしているようです。

## 常世の国

木村 進

今年の初めは、「常世の国(とこのくに)」を少しまとめて紐解いて見たいと思います。

「常世の国」とは古代に不老不死の理想郷をそのような呼び方をしていたようです。

古事記、日本書紀、常陸国風土記などのこの「常世の国」という表現が使われています。

まずは身近な常陸国風土記に書かれている内容です。

まず、各郡の詳細などを現す前に「総記」として書かれた前文の最後に

「それ常陸の国は、境はこれ広大く、地も亦緬邈(はろか)にして、土壤(つち)沃墳(うる)ひ、原

野肥衍(こえ)たり。墾発(ひら)きたる処、山海の利(さち)ありて、人々自得(ゆたか)に、家々足饒(にぎは)へり。設(も)し、身を耕耘(たつく)るわざに勞(いた)つき、力を紡蚕(いとつむ)ぐわざに竭(つく)す者あらば、立即(たちどころ)に富豊(とみゆ)を取るべく、自然に貧窮(まづしき)を免(まぬ)かるべし。況(いはむ)や復(また)、塩と魚の味を求めむには、左は山にして右は海なり。桑を植ゑ、麻を種かむには、後は野にして前は原なり。いはゆる水陸の府贖、物産の膏腴(かうゆ)といへるものなり。

古(いにしへ)の人、常世の国といへるは、蓋(けだ)し疑(たが)ふらくは此の地ならむか。(原文:古人曰常世国、蓋疑此地)

但、有るところの水田、上は少なく、中の多きを以ちて、年に霖雨(ながあめ)に遇(あ)はば、即ち苗子の登(のぼ)らざるを歎(なげ)きを聞き、歳に亢陽(ひでり:好天気)に逢(あ)はば、唯穀実の豊稔(ゆたか)なる歎(よろこび)を見む」

(常陸国風土記 全訳注 秋本吉徳著)

ここでは奈良時代初頭に書かれた常陸国風土記には、古代の人が理想郷として考えていた「常世の国」とは、この常陸国のことを指していたのかもしれないと書いています。常陸国は山と海があり、また野原があつてまさに理想郷のようだというのです。

ただし、その後に各地から伝わる気候の変化などで本来の理想郷とは違う土地の姿も書き加えています。

さて、理想郷である「常世の国」は海のかなたに

あり、中国思想などのように山の上であったり、天上であったり・・・

そのうちに海の中にある竜宮城なども考えられたようです。

少しずつ、古代の常世の国が書かれた記述を調べて見たいと思います。

常陸国風土記の記述でもう一箇所気になっているところがあるので書き加えておきます。

それは「茨城郡（うばらきのこほり）」のところであり、「ここにいう茨城の郡は、今は那珂の郡に属しており、その西部にある。昔は、そこに郡衙が置かれていたから、まさしく茨城の郡の内であった。土地の人々の伝えてきた言いならわしに、「水依（みづより）茨城の国」と言う。」

と書かれています。

現在の石岡の地に茨城郡の郡衙が移される前に、那珂郡の西部にその郡衙があったとあり、茨城郡の郡衙が移されたことが記されています。

さらに「水依（みづより）茨城の国」と言う表現ですが、「水依り」の表記は「水泳（みづくぐる）のマチガイと考える説が有力ですが、茨城の名前の由来に「うまい水の依せるウマラキの意味との解釈もあるようです。前から気になった「水泳（みづくぐる）茨城」の考え方も一つヒントを貰った気がします。」

これは前に百人一首にある在原業平の歌

「ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くくるとは」

の水くくるとの意味について、「くくり染め」という

一般的な解釈がすつきりこないということにも通じます。

常世の国（2）「非常香果（ときじくのかぐのこのみ）」

この今回、「常世の国」古代の理想郷をどのように見るかを考えているのだが、まず、古事記や日本書紀に記載のある「常世の国」との表現がある箇所をピックアップしていきたいと思う。

第2回目は「非常香果」日本書紀「登岐士玖能

迦玖能木實（時じくの香の木の実）古事記について紹介しよう。まずは古事記の内容を見ていこう。

1 古事記（和銅5年（712年）に太安万侶が編纂し、元明天皇に献上されたとされる）

古事記には橘の実について非時香果（ときじくのみ）いつでも香り高い果実であり、常世の実であるという記述があります。

中巻 （11代）垂仁天皇の条

《原文》

・又天皇 以三宅連等之祖 名多遲麻毛理遣常世國 令求登岐士玖能 迦玖能木實。

・故 多遲摩毛理 遂到其國 採其木實 以 縵八縵。矛八矛 將來之間 天皇既 崩

・爾多遲摩毛理 分 縵四縵 矛四矛 獻于太后 以 縵四縵 矛四矛 獻置天皇之 御陵戸而。

・擊其木實 叫哭以白 常世國之 登岐士玖能 迦玖能木實 持參上侍 遂叫哭死也

・其登岐士玖能 迦玖能木實者 是今橘者也。

《読み下し》

・また天皇、三宅の連（むらじ）等の祖先の名前をタヂマモリ（田道間守）という者を常世の国に遣わして、時じくの香（か）ぐの木の實を求めしめたまひき

・依つてタヂマモリ、遂にその國に到りて、その木の實を採りて、縵八縵（かげやかげ）、矛八矛（ほこやほこ）を、將（もち）來（つる）間に、天皇既に 崩（かむあがり）ましき

・ここにタヂマモリ、縵四縵（かげよかげ）矛四矛（ほこよほこ）を分けて、太后に獻り、縵四縵（かげよかげ）矛四矛（ほこよほこ）を、天皇の御陵の戸に獻り置きて、

・その木の實を撃（ささげ）て、叫び哭（おらび）て白（さく）、「常世の國の時じくの香（か）ぐの木（こ）の實（み）を 持ちまゐりて侍（さ）もら」ふ」とまをして 遂に哭（おら）び死にき。

・その時じくの香（か）ぐの木の實は今の橘なり。

《話の概要》

11代垂仁（すいにん）天皇の在位90年の所に、天皇は三宅の連（むらじ）の祖先である多遲麻毛理（タヂマモリ）という人に、海の彼方にあるという理想郷の国「常世の国」に行つて、何時までも香りのよい実をつける（不老不死の果物）「時じくの香（か）ぐの木の実」という果物を取つてきてほしいと命令したのです。

タヂマモリは海の彼方にある常世の国を目指して大海原に船を漕ぎ出し、荒波を越え、やつとの思いで常世の国に到着しました。

そこにあつた「時じくの香（か）ぐの木の実」の

実を八つ、実を連ねた木の枝を八本持って、また必死の思いで海を渡り天皇のいる国へ戻って来ました。

しかし、国に戻ってきたときには、すでに天皇は崩御されていたのです。嘆き悲しんだタヂマモリは持って帰って来た「時じくの香(か)ぐの木の実」の半分(四縷、四矛)を天皇の大妃に差し上げ、残りの半分为天皇の御陵に持って行き、その場で持って帰ったことを報告し、悲しみ、泣き叫んで死んで(自害?)しまいました。

その「時じくの香(か)ぐの木の実」というのが、現在の橘(たちばな)のことです。

#### (解説)

この垂仁天皇は『日本書紀』での名は活目入彦(いくめいりびこ)五十狭茅天皇です。兄は東国に派遣された豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)です。豊城入彦命が東国の統一に進攻している間、活目入彦が天皇の位を継いで、まず畿内周辺の四街道へ四道將軍を派遣し、周りを固めます。そして余命も少なくなつて、この不老不死の木の実を欲したのでしよう。しかし、在位99年(年令は古事記153歳、日本書紀140歳)で崩御してしまい、木の実を持ち帰ったのは、出かけてから10年経っていたのです。

神話(古事記、日本書紀)に書かれた年代をそのまま信じるの無理ですので、この話の年代は三世紀後半から四世紀始めの頃と考えられます。

垂仁天皇の後が景行天皇で、景行天皇の子がヤマトタケル(日本武尊)となります。

一方持ち帰ったという「時じくの香(か)ぐの木

の実」は「縷八縷(かげやかげ)、矛八矛(ほこやほこ)」という表現がされていますが、この畳み掛けるような数の表現は謎賭けのような要素を持ち、八は末広がりで縁起が良く沢山と言う意味も持っているようです。八百万(やよろず)などの表現にもその事が表われています。

縷(かげ)は実を表わし、矛(ほこ)は実が串刺しとなって連なった枝を意味します。

ただ、矛(ほこ)も茅(ち)と通じ、茅の輪のようになこれにくぐって疫病などの災害を防ぐなどの意味ともつながっているのかもしれない。

さて、この橘の木は、常陸国風土記にも出てきます。場所は行方郡のところですが。

「郡の側(かたはら)の居邑(むら)に、橘樹(たちばな)生(お)へり。」と書かれています。

行方郡は茨城郡と那珂郡の地域から653年に分割して成立しました。

(行方)郡衙が何処にあったかは不明ですが、現在の玉造の少し東側にあったと推察されます。

### 常世の国(3) 万葉集と橘

常陸国風土記に橘(たちばな)の記載されたところとして行方郡があると書きましたが、もう1箇所香島郡にも書かれています。

香島郡という表記は常陸国風土記のみで使われ他では「鹿島郡」と一般には表記されています。

653年に行方郡が成立しましたが、香島郡はその4年前の649年に海上国と那珂郡の地域を一部割いて成立しました。

この時に最初に置かれた香島郡の郡衙は、鹿島

神宮の北の沼尾神社付近にあったと推察されています。

「この地にある池には鮒・鯉が多くいて、この池の蓮は美味しくて食べると病が治るといわれている」とあり、また

「この地には以前郡衙が置かれていて、橘(たちばな)がたくさんえられており、その果実は美味である」と記されています。

このように常陸国は行方郡と香島郡の郡衙近くに「橘」の樹がたくさんあったことがうかがえます。

ただ、奈良朝の始め頃には香島郡(鹿島郡)の郡衙は丁度この池(沼尾)とは神宮をはさんだ反対の東南側に移されています。

さて、663年に白村江の戦いで倭国は百済と一緒に唐・新羅連合軍と戦い敗れてしまいました。

その後、九州にこれらの外敵から倭国を守るために防衛軍として防人(さきもり)が派遣されました。

奈良朝になると、東国からも多くの防人が派遣され、常陸国からも一度に200~300人程度の人を徴集して九州に送られました。

この人たちは鹿島神宮で武運を祈り、そこから出立したために「鹿島立ち」などと言う言葉も生まれました。

また、これらの防人は難波に着くと、大伴家持の要請で歌を詠みました。

この行方郡の橘を詠った歌があります。

橘の下吹く風のかぐはしき筑波の山を恋ひ  
ずあらめかも

(万葉集：7371番)

作者は占部廣方(うらべのひろかた)の歌で、「天平勝寶七歳(西暦755年)2月、相替(あいかわり)て筑紫に遣わされる諸國の防人(さきもり)たちの歌」と題が書かれています。

天平勝寶7年(西暦755年)2月9日に、常陸國の防人を引率する役人である防人部領使(さきもりことりづかい)として息長真人國嶋(おきながのまひとのくにしま)が進上したとされる17首の歌の一つだとされます。

占部廣方の役職は「助丁(すけのよぼろ)」で、防人の長「国造丁(くにのみやつこよぼろ)」を補佐する役職でした。

この歌の原文を見てみましょう。

多知波奈乃 之多布久可是乃 可具波志伎 都久  
波能夜麻乎 古比須安良米可毛

となっており、橘の読み(万葉仮名)は「多知波奈」です。

これをどう読むかですが、タチバナ、タチハナとどちらもありでしょう。ただ、「茨城」は倭名類聚抄では「牟波良岐」となっており、ムバラキ(またはウバラキ)と読むと考えられます。

古代(万葉の頃)の発音は、今とは違う発音も多くなされていたようで、「波」の「BA:バ」では

なく「PA:パ」または「FA:ファ」といった発音であったとの解釈もありますので、それが何時、どのように「タチバナ」と変わって行ったのかは不明です。

では平安時代の辞書である「和名抄」の地名からの変化を見て行きましょう。

1) 倭名類聚抄(わみようるいじゆしょう) 略称:和名抄(わみようしよ)

承平年間(931年-938年)に源順(みなもとのしたこう)が編纂。

平安時代の辞書といわれる。ここに当時の国名、郡名、郷名が載っている。

常陸国は東海道の国に分類され、五畿内と隣りあう伊賀国から始まって最後が常陸国となる。

常陸国には

郡名:新治(爾比波里)、眞壁(萬加倍)、筑波(豆久波)、河内(甲知)、信太(志多)、茨城(牟波良岐)、行方(奈女加多)、鹿島(加未之)、那珂、久慈、多珂 とある。

また茨城郡には

夷針、山前、城上、島田、佐賀、大幡、生國、茨城、田舎、小見、拝師、石間、安食、白川、安候、大津、立花、田籠

とあり、「立花」と漢字で書かれています。

これは郡・郷の名前は二文字とするようにお達しが出ていたため、「橘」↓「立花」となったものと考えられます。

## 2) 地名大辞典

地名の大辞典は過去の博士などの有名なものもあるが、一般向けにまとめられた次の2つの大辞典が有名である。

・角川書店:角川日本地名大辞典 8 茨城県 558.12.8 発行

・平凡社:日本歴史地名体系 8 茨城県の地名 1982年11月4日 発行

この2社の内容はそれぞれに特徴があり、古代、中世の地名などについては角川書店が詳しいが、元禄郷帳(1702年)、天保郷帳(1834年)、1882年地方行政区画便覧、1889年市町村制施行、1953年町村合併促進法などでの変化を見るには平凡社が秀でている。

また、旧小字名一覧などは角川書店版にほぼ網羅されている。

橘・立花についての角川書店版の内容をここに少し紹介しよう。

古代:立花郷(たちばなこう)

平安期に見える郷名。「和名抄」常陸国茨城郡十八郷の一つ。「新編常陸」によれば、羽生に橘明神という社があるとい(現在の橘郷造神社か?)、当郷を江戸期の「羽生・沖須・八十蒔・谷島・浜・捨木・倉敷・与沢・山野・幡谷・外ノ内新田・花園新田等ノ十二村」にあてている。

中世:橘郷(たちばなこう)

平安末期~室町期に見える郷名。常陸国南郡のうち。「和名抄」の立花郷にほぼあたる。鹿島社領.....とある。



この地は鎌倉時代を中心に鹿島神宮の領地として寄進された地域である。

近世

・立花村(明治22年〜昭和29年)・羽生・八木蒔・沖洲・浜の4ヶ村が合併・・・現行方市  
・橘村(明治22年〜昭和29年)・・・与沢・山野・幡谷・川戸・外之内・倉数の6ヶ村が合併・・・現小美玉市

上記の「立花も橘も共に古代からの郷名から名付けられており、ともに「タチバナ」という。現在は2つの自治体に分かれてしまっているが、ともに古代の「タチバナ」であり、恐らく橘の樹が多く生えていたことと思われます。

古代の理想郷の「常世の国」の「時じくの香くの木の実」はこの地にあつたという考え方も成り立つのではないだろうか？

古墳時代に垂仁天皇は、常世の国へ行つての「時じくの香くの木の実」を取ってくるように命じました。

当時のような人々がこの地に棲んでいたのかは良くわかりません。

しかし、三味塚古墳や沖洲古墳群が点在するこの地「橘郷・立花郷」から霞ヶ浦周辺は食べ物も豊富で、水もあり、霊峰筑波山が姿をくつきりと浮かべ、日が沈むときには筑波山は真つ赤に萌えます。

そして、歌垣で男女が集い、恋の花を咲かせていたことも想像に難くないでしょう。

(常世の国は次回に続く)

## 水雲問答 (7) (木村 進)

【はじめに】

松浦静山 甲子夜話 巻39【1】より

これは江戸時代の(長崎)平戸藩の藩主であった松浦静山公が晩年の20年間に毎日書き残した随筆集「甲子夜話(かつしやわ)」の中に挿入されている2人(水・雲)の手紙による問答集を理解しようとする試みです。

### (36) 勤(つと)むるは善

雲：

人生は勤むるに成(なり)て、怠るに敗るることは申すまでも之れ無く候へども、勤むるは善きと知りながら、怠り易き者に之有り候。且(かつ)識(し)ればいつにても出来る進(とて)、勤に怠り申す類毎々(つねづね)有り候。天下一日万機に候まま、日新の徳ならで叶なわざることに候。小人の志を得申候も、多くは此処(ここ)より出申候。力(つとむれば)能く貧に勝つと申す古語、面白きやに存じ申候。聊(いささか)のことながら大事に存候。

(訳)

人生は勤むる(努力する)ものが成功し、怠ける者が敗れるというのは申すまでもありません。しかし勤める(勤勉に努力する)のが善であると知りながら、人は怠りやすいものです。また、そんなことは知っているからいつでも出来ると思ひ、努力を怠ることがよくあります。しかし天下のこ

とはたった一日でいろいろなことがおこり、何時何が起るかわかりません。日新(日に新たに)の心がけでなければ叶わないものでしょう。小人(つまらない者)でも志しを得るのは、ここから出ます。努力をすれば貧に勝つという古語は大変良い(面白い)言葉と思います。些細なことのようですが大変大事なことと思います。

(コメント)

・日新の徳・・・「苟(まこと)に日に新たに、日々新たに於て又日に新たななり」(大学)

・力(つとむれば)能く貧に勝つ・・・「力むれば能く貧に勝ち、慎めば能く害に勝ち、謹ねば能く禍に勝ち、戒むれば能く災に勝つ」(説苑)・せいえん(ん)

水：

いつも出来る進(とて)為(せ)ぬは、学人の通幣に多き者に候。小人栖々(せいせい)として勤め、それが為に苦しめられ候こと、昔も今も同様に候。鶏鳴而起、華々(じじ)として善を為すは切近のこと候へども、余り手近過て知れたることよ進、空く光陰を送り候こと、我人ともに警(いまし)むべきの第一たるは勿論に候。貴人、尚更勤(つとめ)ぬ者に候。此くの如き工夫面白く存候。

(訳)

いつも出来るからといって行わないのは、学問をする人のよくある悪いくせです。小人(世間一般の人)がこせこせと勤め(努力し)て、その事によって苦しんでいることは、昔も今も変わりませ

ん。鶏鳴而起（鶏が鳴く声を聞いて起きる）、孳々（じじ）努力し励む」として善を為すということには誰にでも切実なことですが、あまり手近か過ぎで、わかりきったことだとして、うかうかと時を過ごしてしまいます。これは私も含めお互いに注意をしなければならぬ（いましめるべき）第一です。またこれは地位が上の人ほど努力しません。このような工夫のご意見は面白く（良いと）思います。

（コメント）

・鶏鳴而起、孳々（じじ）として善を為す…これは孟子の言葉です。

孟子曰、

鶏鳴而起、孳孳為善者、舜之徒也。

鶏鳴而起、孳孳為利者、蹠之徒也。

欲知舜與蹠之分、無他。利與善之間也。

（鶏が鳴くと起き、勤勉に善をなす者は聖人（舜）の徒である。

鶏が鳴くと起き、せっせと利益の為に行動する者は蹠（せき・足の裏＝盗人）徒である。

この舜と蹠との違いを知ろうと思えば、ほかでもない、目的が利害であるか、善であるかを知ればよい。）

（37） 快活に事をなす

雲…

凡そ事を做（な）すに、快活に致し度候。譬（たと）へば千金の賞を与るにも、藿（おしむ）の心あるときは人恩に感ぜず、一毛を抜て与るも、誠意なれば人感服す。同じ品にても、此方の致し方

にて人の心に徹底せぬことあり。譬（たと）へば儉素の令を下さんと為るに、俗人とかくに蹙眉（しゆくび）して事を做（な）す、故に敗（やぶる）こと多し。豁然（かつぜん）として做（な）さば、人服すこと疑なし。人を使うも、活かして使い、殺して使い申候とは雲泥の相違に候。此所深意思あり。恐れながら徳廟の上意に、人は困りたるときうつ向く者は役に立たず、困りたる連（と）て仰（あ）を向く者が役に立つと。信（まこ）とに恭感仕候。

（訳）

およそ事を行う時は快活にいたしたいと思えます。たとへば、千金の賞を与えても、どこかケチケチした心で与えても人はその恩を感じませんが、一本の毛を抜いて与えるとしても、そこに誠意があれば人は感服します。同じ品でもこちら側のやり方で人の心に徹底しないことがあります。たとへば、質素儉約の令を下すときに俗人はとかく眉をしかめて（けちけちして）令を下すものですから、成功しないことが多くあります。これを豁然（かつぜん）心の迷いが無く開けている様子）として行えば、人は必ず従うでしょう。人を使うのも活かして使うのか、殺して使うのかでは雲泥の相違があります。このところは大変大切なところですよ。恐れながら徳廟（將軍吉宗公）の上意に、「人は困った時に下を向いてしまう者は役に立たず、逆に困ったときに上を仰ぐ者は役に立つ」と言われていますが、まったくもって恭感させられるご意見です。

水…

是は我精神の備（そなえ）と不備との差別に候。快活にするとても、人を服さしめん連（と）、手段しては人は服さぬ者に候。一盃の満たる精神を打ち出して、人の服不服も頓着なしに為ると、やがて人心服し候者に候。蹙額（しゆくがく）して事を為（なす）は、自から何（い）かが有らんと危ふ意故に候。自から危ぶむことの成就するは稀なる者に候。古（いにし）へは行ひ難きことを行ひおほせ、今人は行ひ易きことを行ひおほせ申さず。精神計（ばかり）にもなく、識の足らぬ所も手伝候。識ある上に精神満ていの者は、何（いか）なる大事をも成しおほせ申すべき。享保の尊諭は百折不撓（ひやくせつふとう）の所に候はば、かの精神の盛（さかり）よりならぬは出来申さず候。識ありても柔弱なる人は何の用にも立ち申さぬ所、又この所に候。

（訳）

これは自分の精神が備わっている（出来ている）か不備（出来ていない）かの差であり、快活にしても、それが人を服させようとする思い（手段）であれば、人は服さぬでしょう。心いっぱいの精神を打ち出して、人が服するか、服さざるかなどに頓着せずに行えば、やがて人は服するでしょう。額にしわを寄せて事を行えば、自分からそれが出来るかできないかを危ぶんでいる事になりますからうまく成就することは稀でしょう。昔の人は行いがたき事を成し遂げておりますが、今の人は容易なことでも成し遂げません。これは精神ばかりでなく、識（見識）が足りないところも手伝わっていでしよう。識があつて、その上精神がいっぱいに充実した者は、どんなことにも大事を成し遂

げることができるとしよう。享保の尊諭(將軍吉宗公の教訓)は、百折不撓(ひやくせつぷとう)・何度失敗しても絶対諦めない)の精神であり、このような精神が旺盛でなければ出来ません。識があつても柔弱(軟弱)な人は何の役にも立ちませんと言ふのは、ここにあります。

(38) 赤心を人の腹中に置き、内胃(うちかぶと)を見せてかかれ

雲・

凡そ人は余りと疑ひ申候ては、ことを做(なし)得申さず。疑ふべき者を疑ひ、あとは豁然(かつぜん)たるべく候。尤も疑と云(いふ)もの、もと量の狭(せまき)より起り申候。夫(それ)に我が心中を人の存知候ことを厭(いとひ)申は、俗人の情に候。それ故隔意計(ばかり)出来、事を敗り申候。大事を了する者は、赤心を人の腹中に置(おき)、内胃(うちかぶと)を見せて懸かり申すべきことと存候。

(訳)

およそ人はあまりに疑いすぎては事を成し遂げることができません。もちろん疑わしいところは疑つても、あとは豁然(かつぜん)からり広いこと)としてしているべきです。もつとも疑いというものは、度量が狭いから起ります。それに自分の心中(胸中)を人に知られたくないというのは、俗人の情です。そのため、人とのあいだに意志の隔たりができて、事が失敗するのです。大事をなそうとする者は、赤心(まごころ、誠意)を持って人に接し、自分の胃(かぶと)の内を相手に見せてかかることが大切であると思ひます。

水・

人を疑ひて容(いる)ること能はざること、我心事を人の知らやうに掩(おお)ひ隠すを、深遠なることのやうに心得るは、皆小人の小智より出(いず)ること云うに及ばず候。大丈夫の心事、常々青天白日の如くして、事に臨むに及んでは、赤心を人の腹中に置(おき)て、人を使ふことを我が手足を使ふ如くすること豪傑の処為ならぬ。学々焉々。

(訳)

人を疑つて許すことができないこと、また自分の心の内をひとに知られぬように隠して、いかにもそれが深遠なことのやうに思い込むのは、皆、小人のつまらぬ考えから出ているということと言(い)うまでもないことです。堂々とした大丈夫の心中は、いつも晴れた青空に太陽が輝いているやうに、大事にあたつては赤心(まごころ、誠意)を相手の腹中に置いて、人を自分の手足のやうに使つてこそ豪傑の仕業と申せましよう。これを学(まな)びたいものです。

(焉・えん・文末におき一般的には読まない)

(39) 聖賢と英豪

雲・

天下の大政を乗(と)る者は自任致し申候て掛り申さねば成り申さず候。我が力足らざるを知てことを引き、勝手に致し候もよきことながら、大政を乗るに臨(のぞみ)ては、我が出来ぬ迄も、押付け申候才力なくて叶(かな)はざること存

候。器量一杯に做(な)し申候て叶はざる時は、身退くより外之れ無く候間、自任致し申すべくと存候。

(訳)

天下の大政を執る者は、俺がやるといった自分の力量に自信を持つて臨むようであれば、やり遂げることはできません。自分の力不足を知つてさつさと仕事から手を引き、勝手気ままに暮らすのも良いですが、大政を執るといふ場合に臨んでは、自分では出来ないと思つた事も引き受けてやり遂げてしまふという才力がなければなりません。自分の器量いっばいやりとげて、万(い)うまく行かぬときに、身を引く(辞任する)までのことです。

水・

己を量るの論は前郵に論(ろんじ)候やと覺(おぼ)え申候が、今般の高説は平易の道理にて之れ無く候へども、有為の人、亦此志なかるべからざる所にして、面白く承(たてまつり)申候。然(しか)れども是等は万世の訓とすべからず候。其人を得て論ず当た(べ)きの説に候。是、聖賢と英豪との別に候。英豪の見は時として用ゆべからず。聖賢の語は何づくに往(ゆく)として用ゆべからざるは無き所の段階に候。

(訳)

己の力量を測つて事に当たるといふ論については前の手紙で論じたと覺えておりますが、このたびのご高説は、わかりやすい平易な誰にでもわかるという道理ではなく、志の高い人の議論です。

またこの志しが無ければ言えない所であり、面白くうかがいました。しかし、これらのことは、だれにでも当てはまるといふ訓（おしえ）とはなりません。これが聖賢と英豪の別れるところです。英豪の意見は時として用いることが出来ません。しかし聖賢の語はどの時代、場所などに係わらず用いられないことはありません（使われるものです）。

(40) 権は早く握りて早く脱す

雲…

権の一字、大臣たるものとりて叶はぬ者に候。得るとも、とかく禍の出来勝手の処に候。老子の、客となりて主とならずなど、処世の妙を吐露仕候なれども、時に寄り左様計（ばかり）も申し難く、早く握（にぎり）て早く脱し申候こと、第一と存候。公平にして権を握る禍、何に由りて生ぜんやと存候。

(訳)

権の一字を考えますと、大臣というもの、いやそれ以外でも指導的立場にある者はみな権力を掌握しなければなりません。しかしながら権力というものは、とかく禍いが生じやすいものです。「老子」の、「何事によらず」客となりて主とならず「など処世の妙を吐露仕候しています。時によつては、そのようにばかり申せませんので、権（力）というものは早く握って早く脱却することが第一と存じます。（権力を私しないで）公平にして権を握れば禍など起こりましようや。

水…

是は大に發明の高輪に候。老子の説より教となり申すべく候。

(訳)

これはあなたが考えつかれたすばらしいご議論です。老子の説よりもっと教えとなるでしょう。

(続く)

# 「ふるさと風の文庫」

下記サイトにて販売しています。

(送料は無料です。)

ふるさと風販売 Shop

URL: <https://ishioka.buyshop.jp/>

会報「ふるさと風」、ブログ等に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター（国府 3-1-16）でも常時展示・販売しています。

また、自分で書いたものを本にして見たい方も相談に乗りますので気楽にお声をかけて下さい。



お問合せは：080-3381-0297 木村まで

### 【編集後記】

あけましておめでとうございます。会報「ふるさと風」も200号までは毎月発行、以降は年4回の発行となっておりますが、なんとか地域に根ざした文化の火を消すことなく、18回目の正月を迎えております。今後とも皆様に愛される記事を目指して継続していきますので応援の程よろしくお願いいたします。